

陸游の詩における「憤激」と「閑適」

横山 伊勢雄

南宋の詩人陸游（二五〇—三二〇）は、「憂國の志士」と「孤高の隱者」という二面を内包した詩人として説かれるのが普通である。従つて、陸游の詩の特色も、「悲憤激昂」と「閑適細膩」の二面において論じられている。（注）この二面は陸游においては際立つた特色をなすものであるから、彼の詩をこの二面から分析することもまた首肯すべき方法であると思われる。私は陸游の詩における右の二側面を、「憤激」と「閑適」の語によつて把え、兩者のかかわりあいを以下に論じてみたい。ここに言う「憤激」とは、政治社會の不正に對する激しいいきどおりを意味する。つまり、憂國の情に發する政治的現實への公憤をいうのであつて、單に個人的不遇に發する憂愁や不平をいうのではない。この公憤の凝集したものが「憤激の詩」なのである。これに對し、「閑適」とは、平靜な心境において日常的生を楽しむ意味であつて、生きていくことの幸福感を、身邊の日常的な事物に投影させつつ、こまやかにうたうものが「閑適の詩」なのである。

この意味における憤激と閑適の詩は、中國の詩に極めて多い。しかし、一人の詩人においての現われ方は、微妙な差はありながらも、大むね一つのパターンに屬している。それは、詩人が政治社會における挫折を契機として官職を棄てて隱棲してしまふことであり、この環境や心境の變化に對應して、その詩もまた「憤激」から「閑適」へと變化することである。この場合には、本來志士的と隱者的という相い矛盾した内容も、その現われ方に矛盾はないといつてよい。

しかし、陸游の場合には、「憤激」と「閑適」の詩が、早年晩年をとわず同一の生活狀況において、こもごもに現われてくる。極端な例としては、數日の間に兩者が作られるということがある。それ故、陸游は本來志士的な姿勢の詩人であつて、その本質的なものは「憤激」の詩にあるとし、度重なる挫折によつてそのエネルギーが内部に沈潜して「閑適」の詩に結晶したのだとするような明確な答えは出しにくい。これは、陸游は本來隱者的であるとする考え方においても同様である。本來矛盾する兩者を無理に統一させようとすると、一から他への轉化の説に陥り易い。むしろ、この大きな振幅

もつて揺れ動いていた詩人の心理の動きを、ありのままに把握することが、陸游の詩のもつ二つの特色を考える上で必要なことではなからうか。かく考え、以下の論は、主に蜀の地における陸游の詩を對象として、「憤激」と「閑適」という二つの特色のかかりあいを考察していく。

二

陸游は紹興の名家の出身で、祖父陸佃は禮部侍郎・尚書左丞にまで至り、父陸宰もまた官吏であつた。陸游の進むべき道は、幼い頃からすでに決まつていたと見てよい。進むべき道とは官吏となることである。官吏となつて國家社會のために盡くすことである。これは、儒家思想を基盤として新しい士大夫階級を形成した宋代の知識人達の國家と社會に對する強烈な責任感と使命感に發するものであり、陸游もそのような教育を受けて來たのである。

しかし、陸游が官吏として進む道は、その入口においてせばめられてしまつた。一一五三年、二九歳の時、省試に第一位で及第した陸游は、孫の秦垔を一位としたい秦檜の憎しみをかい、翌年の殿試では拔群の成績にもかかわらず秦檜の妨害によつて落第させられてしまつたのである。秦檜の死（一一五五年）の後、進士出身の資格を得（一一六二年）たものの、地方官の通判として各地を轉々とさせられ、ようやく中央の官に召されても國史編修官や秘書監という閑職ばかりであつた。それも時の權力者達を批判しては度々免職になつてゐる。彼が、その八五年の生涯のうち、實際に官職についていたのは、通算しても二十年間ほどでしかないのである。

このように、陸游は官界において常に不遇であり、また孤立して

いた。いわば挫折のくりかえしであつた。しかし、彼の詩に現われる憤激は、他の多くの詩人が自己の不遇をかこち不平不満を鳴らすものとは異なる。彼のそれは、自身は不遇に置かれながらも、益々強烈となる、國家と社會に對する責任感と使命感に支えられた公憤なのである。知識人が使命を果たす理想の場は、要路の官にあつて天子を補佐し正しい政治を行なうことのできる官界と考えられていた。陸游には既にその場に臨む機會は殆んどない。官界において力を奮うことができないとすれば、彼に残されたものは文章によつて政治を批判し正義を叫ぶことしかない。それは、直接的には政治上の意見を上書することであり、間接的には詩によつて人々に呼びかけることである。陸游は、侵略者金との和親論者を中心であつた秦檜の死によつて、主戰論者への彈壓がゆるみ、御史や諫官の上申が奨励されるようになったことを、言論の道が開けたと感激し、「近傳下詔通言路、已卜餘年見太平、聖主不忘初政美、小儒惟有涕縱橫」（「新夏感事詩」）とうたつた（一一五七年）。しかし、この期待は彼が官職につくとともに裏切られてしまつた。彼の上書は、政治の中樞に在る者に容れられず、反對にそのつど彈壓を受けて職を免じられる結果しか生まなかつたのである。もはや陸游に残された手段は詩しかない。かくて彼は、詩において政治社會に對する批判をなし、また激しい憤りを率直にうたいあげるのである。

三

陸游のこのような詩における激しい怒りは、侵略者たる異民族金への憤激という點に凝集して現われる。この點が陸游の詩を他の詩人の詩と異ならせる最大のものである。金が南侵して北宋の都汴京

を陥れたのは、陸游が二歳の時であつた。以後、中國の北半を失つた南宋は、幾度か金軍の侵略にあい、反撃ならずして金に屈從する屈辱的講和を結ぶことをくりかえしていた。陸游は中國のこの現状に切齒扼腕し、徹底抗戦を主張し、北方領土の恢復を叫び續けたのである。

一一七〇年秋、四六歳の陸游は四年間の故郷での生活を後に、夔州に通判として赴任。以後、興元・成都・蜀州・嘉州などを轉任し、一一七八年春に都へ召還されるまでの八年間を蜀の地方で過すこととなつた。この地での陸游は、四川宣撫使王炎が陝西省の興元に駐留している時、その暮下に招かれて、金と直接對峙する最前線の生活を經驗（一一七二年三月～十一月）したことによつて、金を擊退すべしの感情を最も高潮させている。

金錯刀行 (一一七三年嘉州での作)

黄金錯刀白玉裝

黄金の錯刀、白玉の裝

夜穿窗扉出光芒

夜窓扉を穿ちて光芒を出だす

丈夫五十功未立

丈夫五十にして功未だ立たず

提刀獨立顧八荒

刀を提げて獨り立ち八荒を顧みる

京華結交盡奇士

京華交りて結ぶは盡く奇士

意氣相期共生死

意氣相ひ期す生死を共にせんと

千年史策恥無名

千年の史策無名を恥づ

一片丹心報天子

一片の丹心天子に報せん

爾來從軍天漢濱

爾來從軍す天漢の濱

南山曉雪玉嶙峋

南山の曉雪玉嶙峋たり

嗚呼楚雖三戶能亡秦

嗚呼楚は三戸と雖も能く秦を亡ぼす

豈有堂堂中國空無人

豈に堂堂の中國にして空しく人無きこ

とやらんや」

この詩にうたわれた慷慨は、まさに劍を引つ提げて國難に赴かんとする志士のそれである。「丈夫五十功未立」や「千年史策恥無名」の句には、金を擊退することのできぬ焦燥感がよみとれる。彼が歴史に名を残すような功名を立てんと願うのは、單なる名譽欲による功名心から出たものでないことは明らかである。陸游の詩に「功名」の語はしばしば見られるが、彼の言う功名とは、「古來賢達士、初亦願躬耕、意氣或感激、邂逅成功名」（蟠龍瀑布詩）というように、本來は平和な生活を願ひながら、その平和を脅かす亂れた時世に遇えば、奮い立つて志を同じうする人と共に、世をあるべき姿に變革することを意味するのである。これは知識人の使命感から出たものであつて、その果たすべき事がらが歴史を動かすほどに大きいことを「千年の史策」と表現したもので、結果によつてもたらされる「名」は、彼の問うところではない。

しかし、陸游が呼び續ける國土統一の悲願は一向に實現されず、彼の志士的な豪放な詩に沈痛なひびきが含まれるようになる。その生活も時に放埒に流れ、人々の非難を嘲笑しつつ、自から放翁と號して（一一七六年）氣ままな日を送りながらも、陸游はなお憤激の詩を作り續けるのである。その詩は、彼の當時の生活を反映して、希望と絶望の間を搖れ動く彼の複雑な心情が示されている。

關山月

(一一七七年春成都での作)

和戎詔下十五年

和戎の詔下りてより十五年

將軍不戰空邊邊

將軍 戦はずして 空しく邊に臨む

朱門沈沈按歌舞

朱門 沈沈として 歌舞を按じ

廐馬肥死弓斷弦

廐馬 肥死して 弓弦を斷つ

成樓刁斗催落月 成樓刁斗落月を催し

二十從軍今白髮 二十軍に従ひ今 白髮

笛裏誰知壯士心 笛裏 誰か知らん 壯士の心

沙頭空照征人骨 沙頭 空しく照らす 征人の骨

中原干戈古亦聞 中原の干戈 古へも亦た聞く

豈有逆胡傳子孫 豈に逆胡の子孫に傳ふる有らんや

遺民忍死望恢復 遺民 死を忍んで恢復を望む

幾處今宵垂淚痕 幾處か 今宵 涙を垂れし痕

一六四四年に金と屈辱的な講和をし（隆興の和議）、小康状態を保つことに汲々としながら、安逸な日を過ごすと親派の將軍や大官達に對する憤激の詩である。彼等の安逸な生活の影に、空しく戰場に老いる兵士達のあることを、陸游は鋭く衝いている。彼が徹底抗戦を主張するのは、「諸公勉書平戎策、投老深思看太平」（登劍南西川門感懷詩）と、平和を願い、「中原日月用胡曆、幽州老酋著柘黃、滎河溫洛底處所、可使長作旃裘鄉」（秋興詩）と、異民族の支配下にあえぐ同朋の解放を願うためにはかならない。しかし、陸游のこの願いは彼の生きていく間に果たされることはなかつた。従つて彼は、死の直前まで、失地恢復による民族の平和を叫び續けたのである。「死去元知萬事空、但悲不見九州同、王師比定中原日、家祭無忘告乃翁」（示兒詩）と、辭世の作にまでその悲願はうたわれている。彼の詩に、中國の現状に對する激しい憤りと憂國の情があふれ、彼が愛國詩人と稱される所以は、陸游の生涯一貫した、平和を希求しそのために金に抗戦しようとする姿勢にあるのである。

四

陸游のこのような姿勢を支えているのは、社會に對する知識人としての使命感と、人民に對する愛情とである。「歸老寧無五畝園 讀書本意在元元、燈前目力雖非昔、猶課蠅頭二萬言」（讀書詩）と、成都における失意の生活にあつても、なお自ずから毎夜の學問を課すのは、自分が學問する本來の意味は人民につくすことにあると自覺するからである。陸游は社會への責任感に基づかない、利己的あるいは書齋的學問は否定する。「儒生辛苦望一餉、趙超光範祈哀憐、齒搖髮脫竟莫顧、詩書滿腹身蕭然」（估客樂詩）と、世に無用の學者を、陸游は苦い自省をこめながら批判しているのである。

陸游はまた、詩人としても一定の自覺をもつていた。「衣上征塵雜酒痕、遠遊無處不消魂、此身合是詩人未、細雨騎驢入劍門」（劍門道中遇微雨詩）と、世俗が詩人にふさわしいとする境地を彼は拂拭しようとするのである。彼も自からの詩歴を顧みて、「我初學詩日、但欲工藻繪、中年始少悟、漸若窺宏大」（示子通詩）と云うように、若い頃は字句の雕琢と典故の多用を尊ぶ江西詩派の流れをくんでいた。しかし中年になつて「詩爲六藝一、豈用資狡獪、汝果欲學詩、工夫在詩外」（同上）と自覺したのである。詩はあそびの具であつてはならない。「詩外」の世界、つまり現實の生活における正しい思想・行動の中から生まれるものでなければならぬ。かく陸游は自覺していた。「豈其馬上破賊手、哦詩長作寒蟬鳴」（長歌行）と、まず精神のエネルギーは思考と行動に注ぐべきであつて、ひぐらしの鳴きつづけるように詩をうなることにのみ費やすべきではないとするのも、彼のほんとうの詩は現實と遊離したところからは生まれまいとする自覺の現われなのである。

しかし、陸游の現實の正しい思想と行動を第一義とする信念も、

彼が置かれた官界においては、實踐することが困難であつた。彼は「天下自有公論、非愛憎異同能奪也」(跋東坡諫疏草文)と考へ、正義は行なわれるべきものと信じていた。だが政治は正義に反した策動によつてなされる場合が多い。政治をつかさどる者が己の榮達や保身のために公論を無視し、正義に反する動きを見せることを、陸游も痛感させられて來た。彼は、時に、聲を大にして正義を叫ぶことは徒勞ではないのか、己の學問が果たして人民の役に立つのであるうかと、虚無的な思ひにかられる。「文章一字無人識、胸次徒勞萬卷蟠」(杜叔高秀才雨雪中相過留一宿詩)という思ひが、蜀の地にある彼の胸中をしばしばよぎつたことであらう。

陸游が徹底抗戦を訴え、中國の領土恢復を叫ぶ姿は、荒野に獨り立ち、己の聲の虚空に響くのを聞くに似ていた。彼は孤獨感や焦躁感にさいなまれつつ、寂寞に耐えていたのである。その寂寞は、魯迅の「凡有一人的主張、得了贊和、是促其前進的、得了反對、是促其奮闘的、獨有叫喊于生人中、而生人並無反應、既非贊同、也無反對、如置身毫無際的荒原、無可措手的了、這是怎樣的悲哀呵、我于是以我所感到者爲寂寞。」(吶喊「自序」)という寂寞と同類のものと見てよいであらう。陸游の寂寞における感情の揺れは、魯迅ほどに複雑微妙ではなく、大きく極から極へと振動する壯士的な太いものであるけれども。

樓上醉歌

(一一七五年夏、成都での作)

我遊四方不得意

我四方に遊びて意を得ず

陽狂施藥成都市

狂と陽狂は 成都市の市に施藥す

大瓢滿貯隨所求

大瓢滿ち貯へて求め所るるに隨ひ

聊爲疲民起憔悴

聊か疲民の爲に憔悴を起こす

飄空夜靜上高樓

飄空しく夜靜かにして高樓に上り

買酒捲簾邀月醉

酒を買い 簾を捲き 月を邀へて醉ふ

醉中拂劍光射月

醉中 劍を拂へば 光り月を射し

往往悲歌獨流涕

往往 悲歌して獨り涕を流す

劉却君山湘水平

君山を劉却せば 湘水平かに

斫却桂樹月更明

桂樹を斫却せば 月更に明かならん

丈夫有志苦難成

丈夫 志有るも成り難きに苦しむ

修名未立華髮生

修名 未だ立たずして 華髮生ず

この詩にいう「君山」と「桂樹」は世の障礙物の形象であるが、侵略者金を指すことは明らかである。それを除去して世を平らかに明るくせんとする希望も、仙人になりそこねた吳剛が切り口のすぐふさがつてしまう月中の桂樹を永遠に切り續けねばならないように、自分の力では不可能なことではないのかという絶望感が陸游を捉えるのである。人間はこのような寂寞に長く耐えうるものではない。魯迅が、「只是我自己的寂寞是不可不驅除的、因爲這于我太痛苦。我于是用了種種法、來麻醉自己的靈魂、使我沈入于國民中、使我回到古代去」(同上)と、「魂の麻醉」によつて寂寞を除こうとしたように、陸游も自分自身の寂寞を、日常生活の平穩さに没入することによつて、除去しようとした。魯迅の魂の麻醉が一時的なものであり、やがて人々を眠りから目覺めさせ社會という「鐵の部屋」をこわさせるために、文章によつて吶喊の叫びを上げたように、陸游もまた「我語壯士勉自強、男兒墮地志四方、裹尸馬革固其常、豈若婦女下大堂」(離頭水詩)と、「突進する猛士」のために吶喊の叫びをくりかえすのであるけれども。

五

一一七五年正月、四川制置使の范成大に招かれた陸游は、參議官としてその幕下に入った。かつて同僚であつた范成大は陸游を部下としてでなく詩友として待遇してくれたが、陸游は沈滞した周圍の空氣をきらい、翌年には官を去り、祠祿を受けて氣儘な恩給生活に入った。

和范待制秋興（一一七六年秋、成都での作）

策策桐飄已半空 策策として桐は飄り 已に半ばは空し

啼蛩漸覺近房櫺 啼蛩 漸く覺ゆ 房櫺に近きを

一生不作牛衣泣 一生 作さず 牛衣の泣

萬事從渠馬耳風 萬事 渠の馬耳の風に從はん

名姓已甘黃紙外 名姓 已に甘んず 黃紙の外

光陰全付綠尊中 光陰 全て付す 綠尊の中

門前剔啄誰相覓 門前の剔啄 誰か相ひ覓む

賀我今年號放翁 賀すなり 我 今年放翁と號せるを

陸游は自から放翁（きままおやじ）と號し、萬事は馬耳東風と受け流して、これからの人生はすべて綠酒の樽の中と、いさきか自嘲をこめながらうたつている。

閑意（一一七七年冬、成都での作）

柴門雖設不曾開 柴門 設くと雖も 嘗て開かず

爲怕人行損綠苔 人の行きて 綠苔を損するを 怕るるが爲なり

好日漸催春意動 好日 漸く春意を催して 動き

好風時捲市聲來 好風 時に市聲を捲きて 來たる

學經妻問生疎字 經を學ぶ 妻は問ふ 生疎の字

嘗酒兒斟激盞盃 酒を嘗むる兒は 斟む 激盞の盃
安得小園寬半畝 安くにか得ん 小園の寬さ半畝なるに
黃梅綠李一時栽 黃梅綠李 一時に栽えんことを

この詩は、余裕のあるのどかな氣持を意味する「閑意」の題でも明らかのように、日常における身邊のささやかな幸福をうたうものである。閑適の詩の典型といつてもよい作品であろう。このように陸游は、社會の動きとかかわりない平凡な生活の中にあつて、生きてゐる喜びをかみしめていられる時間に没入する一面をもつてゐる。

このことは、蜀の地に赴任する前に故郷で作られた、有名な「遊山西村」の詩などにも現われていた。彼は純朴で平和な農村の生活をこよなく愛するが、それは「農家農家樂復樂、不比市朝爭奪惡、宦遊所得眞幾何、我已三年廢東作」（岳池農家詩）というように、權力と利益の爭奪に明け暮れる官界と都市の生活に對比される、純朴で平和な農村の生活を、人間のあるべき姿と考えるからである。そのような、平凡ではあるが人間としての本質的な幸福を、陸游は自分の日常生活においても追求しようとするのである。

陸游が農村を愛するのは、「躬耕本是英雄事、老死南陽未必非」（過野人家有感詩）「古來賢達士、初亦願躬耕」（蟠龍瀑布詩）というように、自分で耕作する生活こそ人間本来の在り方であるとする思想に基づく。農耕生活を基盤としつつ、時に遇えば世に出て社會のために力を奮うのである。彼はまた、「蓋聞爲政之術、務農爲先、使衣食之粗充、則刑辟之自省。」（戊申嚴州勸農文）と、農業は國家の基盤であり政治においてもまず農業のことに務むべきであると考へていた。彼は官にある時はそれを實踐した。四川省から歸京の後、江西省撫州の役人をしてゐた陸游が、水害による飢饉の時、農民に

役所の米を分ち與え、罪を得て免職になつた（一一八〇年）ことはその一例である。ともあれ、陸游は農村を愛し、故郷に居る時は自ら耕作し、また病人に藥を施し、庶民の生活に没入しようとした。

小園四首 其一（一一八一年夏、故郷での作）

小園煙草接鄰家 小園の煙草 隣家に接し

桑柘陰陰一徑斜 桑柘陰陰として 一徑斜なり

臥讀陶詩未終卷 臥して陶詩を讀み 未だ卷を終へざるに

又乘微雨去鋤瓜 又 微雨に乗じて 去きて瓜を鋤く

ここには閑適にひたる陸游の姿があるが、彼がなお壯志を抱いていることは、小園四首の其の二の作によつて知られる。

少年壯氣吞殘虜 少年の壯氣 殘虜を吞みしが

晚覺丘樊樂事多 晩に覺ゆ 丘樊 樂事多きを

駿馬寶刀俱一夢 駿馬 寶刀 俱に一夢にして

夕陽閑和飯牛歌 夕陽 閑に和す 飯牛歌

結句にある「飯牛歌」とは、淮南子の道徳訓に見えるもので、齊の甯戚が明主に逢わず牛飼いの賤役にある身を歎いて作つた歌である。歌そのものは功名を得られぬ男の歎きの歌であるが、甯戚はこの歌を聞いた桓公に用いられて國相となつた。このことを詩に用いた陸游の心情には、再び時を得て志を伸ばすことへの期待がひそんでいるのである。

陸游の閑適を求める心情は、隱者と共通するものを含みながら、その姿勢において異なる點は、彼が社會に背を向け現實から逃避してしまふことを否定することである。南宋の大儒朱熹が、官を退き景勝地武夷山で學校を開いたとき、陸游はこう呼びかけている。「身閒剩覺溪山好、心靜尤知日月長、天下蒼生未蘇息、憂公遂與世

相忘」（奇題朱元晦武夷精舍詩）と。人民が苦しみから解放されていらない社會の現實に背を向け、山水の中に閑日を送る生き方を陸游は批判するのである。陸游にも一時的に社會を没却することはあつた。そこから、先に引いたような閑適の詩も生まれたのであるが、彼は常に社會の現實に立ちもどることを忘れなかつた。ここに、陸游を、またその閑適の詩を、隱者的なものにさせなかつた要因が求められる。封建的權威社會にあつては、「自由」を得るためには、權威に屈従するか、權威から逃避して隱者となるかしかない。陸游はそのような安易な道を進まず、常に權威に抵抗する姿勢をとり續けたのである。

六

陸游は下積の官職を轉々とし、幾度も免職の憂き目にあつて、官界の現實に絶望感を抱かせられた。「少年亦慕宦遊樂、投老方知行路難」（滄灘詩）と、陸游は青年時の夢の挫折を感じ、己の鐵石の壯志も、「平生鐵石心、忘家思報國、即今冒九死、家國兩無益」（太息詩）と、家・國ともに益することのないものではなかつたかと、虚無感をも抱く時があつた。彼はその寂寞をいやすために、「富貴功名不擬論、且浮觥盞寄煙村」（村居詩）・「老來世事渾成嬾、一櫂幽尋未擬回」（醉中登避暑臺詩）と、農村や山水を訪ね歩くのである。それでもいやしがたい寂寞は、彼を故郷の平穩な生活への思いに驅る。「久客天涯憶故園、彊名官寺只衡門、何時定卜三巴去、思臥孤舟聽斷猿」（東園晚步詩）と、陸游は故郷に歸る日を思う。しかし、彼には一方において、「歸計未成留亦好、愁腸不用遶臯門」（出縣詩）と、江蘇の地を斷腸の思いで綿々とかえりみることを無

用のものとする氣持がある。故郷に歸る機会がないとすれば、留まるもまたよしとする。彼は官界においていかに不遇であつても、自から官を棄てて隱棲しようとはしない。逆に、幾度もの免職によつて故郷に歸りながら、機會がある度に積極的に官職につこうとしている。これは、先述したように、躬耕生活を人間本來のものとしながら、國家社會に對する責任感、使命感が、陸游を驅り立てるからである。

元來、平凡な日常生活における幸福を人間本來のものとして求める陸游は、どこに居ても自分の私生活は大切にしたい。躬耕の場を得られなければ、それと本質的には同じ閑適を、自分の日常において追求し、生活を充實させたのである。彼のこの姿勢は、宋人に共通する巨視的な人生觀に支えられたものと考えられる。「浮生何處非羈旅、休問東吳萬里船」(江濱池醉歸馬上作詩)・「從來好境遍人間、無奈勞生自缺閑」(登樓詩)と、彼は不安定な人生はどこにいてもすべて旅と同じとする。とすれば逆に、人の心を安定さす場所とは人間世界のどこにもあり、無理にエネルギーを費やして閑適の場を求めることはないし、遠い故郷の地に綿々と思いをはせる必要もない、と陸游は考へるのである。この思想からすれば、社會の現實に對し不平不満を抱いたとしても、そこから逃避して隱者となる必要はない。人の世の有様に生のままでぶつかり、その中から眞の幸福をつかみとればよいのである。陸游の憤激の詩も閑適の詩も、このような生活態度の基底から作り出されたのであつて、單に形の上の環境の變化によつて、兩者の現われ方が變わるものではないのである。陸游の五十代の詩に、「少攜一劍行天下、晚落空村學灌園」(灌園詩)といつた、若い時の宦遊と老年の村居を對比した

詩句が、ままた見出される。しかし、このことから、彼の詩を憤激から閑適への轉化と説くことは誤りである。彼は六十代の前半は再度官職についているし、八十五年の彼の生涯からいへば、五十代はまだ壯年の時期でしかないからである。

陸游の憤激は、政治の大局に向けられるだけではない。彼は人民の生活に積極的にとけこんで、彼等の喜怒哀樂を肌で感じとり、それを自からの感情としていた。陸游は人民を苦しめる政治の現實に激しい憤りを感じ、詩人に課せられた使命として政治の惡を告發するのである。晩年におけるこのような憤激の詩も見落してはならない。

僧廬

(一一九三年春、故郷での作)

僧廬土木塗金碧

僧廬の土木 金碧を塗り

四出徵求如羽檄

四もに出で徵求すること 羽檄の如し

富商豪吏多厚積

富商 豪吏 厚積多く

宜其乘金如瓦礫

宜なり其の金を棄つること瓦礫の如きも

貧民妻子半菽食

貧民の妻子 半菽の食

一飢轉作溝中瘠

一たび飢うれば 轉じて溝中の瘠と作る

賦斂鞭笞縣庭赤

賦斂の鞭笞 縣庭 赤く

持以與僧亦不惜

持して以て僧に與ふるも亦惜しまず

古者養民如養兒

古は民を養ふこと兒を養ふが如く

勸相農事憂其飢

農事を勸相して其の飢うるを憂ふ

露臺百金止不爲

露臺 百金 止めて爲らざる

尙媿七月周公詩

尙ほ媿は 七月 周公の詩

流俗紛紛豈知此

流俗 紛紛 豈に此れを知らんや

熟視創殘謂當爾

創殘を熟視して當に爾るべしと謂ふ

傑屋大像無時止

安得疲民免飢死

傑屋 大像 時として止む無くんば
安んぞ疲民の飢死を免るるを得んや

この詩は、政府が人民を搾取することによつて、佛教を保護することを激しく批判している。諷諭というよりは、告發である。陸游の「書通鑑後」の文を見ると、彼は、財貨は官府と人民とに在るべきものと考へていた。彼は官府の財貨はやがて何らかの形で人民に還元されるものとして、一時的に官府にも集められるのであつて、天下の財貨はすべて民のために使われるべきものとするのである。ところが現實においては、財貨は詐取と搾取によつて權臣・貴戚・強藩大將・兼并・老釋といつた一部の特權階級に集中して、國庫は窮乏し、民力は窮悴する結果となつてゐることに、陸游は激しく憤つてゐる。右の詩も、このような陸游の思想から出た憤激と考へてよいであらう。

七

上述したように、陸游の詩、ことに五十歳前後に蜀の地で作られた詩は、憤激の詩と閑適の詩がこもこもに現われてくる。この二様の詩は、その方向において、社會に向う遠心的なものと、個の内面に向う求心的なものと、相い矛盾するような性質を確かに持つてゐる。しかし、單に詩の素材や方向性のみをみて、志士的であるとか隠者的であるとかいい、またそのことから陸游を「憂國の志士」とか「孤高の隱者」とかいうことはできない。まして、陸游の姿勢あるいは詩作品が、二つの矛盾する側面によつて構築されたものであると結論することはできない。陸游の思想と行動の基底にあるものは、人間の眞の幸福を願う心であり、彼の人生と文學はすべてそこ

から照射されたものなのである。ただ、彼と社會との對應における相互の作用・反作用が、現實には屈折し交錯したために、率直に心情が表白される彼の詩が、彼の心情の揺れ動くままに様々の内容をもつたのである。この詩人は根源的な點において、いささかの矛盾もなく、見事に統一されてゐるといつてよい。

陸游が主張し續けた北方領土の恢復のための金との抗戦は、現實のものとなれば、日常性の放棄を前提とする。また、戰爭という特殊な狀況においては、人間性は失われ、代行性と畫一性のある一つの部品として人間は扱われる。このことと、日常性の中において人間的な幸福を守ろうとすることは、そのことだけを對應させれば矛盾するものである。しかし、金との戦いが中國民族の平和の回復のためであり、人民の日常性を守るための抵抗であることを考へれば、その矛盾は止揚される性質のものである。陸游の思想や生活が、巨視的な人生哲學によつて支えられてゐる點を忘れてはならない。

上述のような陸游の思想と文學を支へてゐる、より人間的なものは、彼の健康な肉體と純粹な感情とであると考へられる。彼は相次ぐ旅にも、「此身且健無餘恨、行路雖難莫更論」（雨中泊趙屯有感詩）、「獨喜此身強健在、又搖團扇著絳蕉」（初夏道中詩）と、健康な身體によつて余裕をもつて耐へ得た。また、「疾歩登城殊未衰、欣然一笑擲筇枝」（暇日行城上同行追不能及詩）と、誰にもまけない脚力を誇つてゐる。この身體の頑健さが、彼に八十五歳という長壽を與えたのであるが、彼の性格に素直さと明るさをも與えたのである。また彼は、遠く家郷を離れた蜀の地に、不遇の身を置きながらも、「老客天涯心尙孩」（晚春書懷詩）と、嬰兒のような純粹な心であらうとした。次の詩など、六八歳のこの詩人がなお童心を失つ

ていないことを示している。

書適二首 (其の一)

老翁垂七十 老翁七十に垂なみそんとするも

其實似童兒 其の實 童兒に似たり

山果啼呼覓 山果 啼なき呼よびて覓もとめ

鄉雛喜笑隨 鄉雛きょうにう 喜よろこび笑わらひて隨まふ

群嬉累瓦塔 群ぐんれ嬉たのしみて瓦塔かきを累たね

獨立照盆池 獨ひとりり立ちて盆池ぼんちに照あらす

更挾殘書讀 更またに殘書ざんしよを挾くわみて讀よむ

渾如上學時 渾すべて學まなぶ上のほる時の如ごとし

彼の童心を樂しませる快適で自由な生活のうた、それが詩題の意味である。陸游は、このように子供の心にも似た純粹な精神を持ち續けた希有の詩人であった。この純粹な精神から發した怒りと喜びとが、それぞれ「憤激の詩」と「閑適の詩」とに定着したのである。

なお、紙幅の關係で省略したが、陸游の憤激の詩には古體が多く、閑適の詩には近體が多い點や、彼の閑適の詩が同時代の范成大や楊萬里などに見られる平易輕快な身邊雜詩とどのような關係にあるかという點など、檢討を加えるべき問題點が残されていることを付言しておく。

(注) 錢鍾書氏は陸詩の主要な二面として、「一方面是悲憤激昂、

要爲國家報仇雪恥，恢復喪失的疆土，解放淪陷的人民；一方面是閑適細膩，咀嚼出日常生活的深永的滋味，裨貼出當前景物的曲折的情狀。」と、「悲憤激昂」と「閑適細膩」との二つに要約している。「宋詩選註」(一九五八年・人民文學出版社刊) 一九二頁。

錢氏のこの見解については、一海知義氏の「陸游」(中國詩人選集二集)、小川環樹氏の書評(中國文學報第七冊歐小牧「愛國詩人陸游」・同第十冊錢鍾書「宋詩選註」・同第十三冊朱東潤「陸游傳」)などに言及がある。ことに小川氏の書評における問題點の指摘は示唆に富み、本稿もその示唆に觸發されて成つたものであることをここに記しておきたい。

(本學講師)